

非認知能力の育成を目指した表現教育プログラムの開発

— 自尊感情, レジリエンス, コミュニケーション能力の育成に焦点をあてて —

Development of Non-cognitive Skills for University Students based on Expression Education

次世代教育学部教育経営学科

河村 勇希

KAWAMURA, Yuki

Department of Management for Education
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育開発センター

岡本 愛香

OKAMOTO, Aika

Center of Education for Future Generations

次世代教育学部教育経営学科

ナリス マノロスカル

MANOROTHKUL, Naris

Department of Management for Education
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

増岡 希望

MASUOKA, Nozomi

Department of Early Childhood Development
Faculty of Education for Future Generations

次世代教育開発センター

塩津萌々夏

SHIOTSU, Momoka

Center of Education for Future Generations

要旨：本稿は、環太平洋大学次世代教育開発センターの取り組みである「EXプロジェクト～表現教育者育成プログラム～」の内容・成果・課題について考察することを目的とした。「受講生が非認知能力を理解すること」「受講生が非認知能力の高め方を理解すること」「受講生自身の非認知能力を高めること」を目的に、非認知能力の中でも「自尊感情」に焦点を当て、歌・ダンス・即興演技・対話などの表現活動を軸としたワークショップの体感、リフレクション、非認知能力についての講義などを中心としたプログラムを開発した。週1回合計4回のプログラムを行う中で、受講生が他の学生との交流や体験の振り返りを通して、自尊感情や表現教育、さらには自分自身の変化について理解を深めているように感じられた。今後は「レジリエンス」と「コミュニケーション能力」に焦点を当ててプログラムを継続するため、そこでの成果を確認するに加え、参加者の変容についてアンケート調査等を用いて明らかにする必要があると考える。

キーワード：非認知能力, 表現教育, 自尊感情, アクティブラーニング

I. はじめに

近年、子どもの発達において将来に大きな影響を及ぼす要因として「非認知能力」が世界中で注目され、日本でもあらゆる教育機関が非認知能力の育成に注力し始めている。この非認知能力とは、IQなどの数値で示される認知能力とは異なり、「学びに向かう力や姿勢」のような「目標や意欲、興味・関心をも

ち、粘り強く、仲間と協調して取り組む力や姿勢」を中心としたスキルであるとされている（無藤, 2016）。OECDが幼児期に育むべき力として「社会情動的スキル（非認知能力）」を提唱していることや、新学習指導要領の中で、知識、理解に加えて学びに向かう力や人間性などの資質、能力を育むことを重要な要素としている背景もあり、非認知能力に関わる研究や実践は幼児教育、初等中等教育の領域が主となっているが、

中山（2018）は、大学生の非認知能力を育むことも重要であると述べている。その重要性は、VUCA時代と言われるような不確かな未来で活躍することのできる人財育成という視点と、大学という特殊な環境に加え、近年のコロナウイルスの流行によって更に加速した大学生のうつ病増加など、大学生が抱える様々な社会課題を解決する糸口になるという視点の両方から考えることができる。

非認知能力を育む教育として、表現教育が挙げられる。表現教育とは、演劇、ダンス、音楽、美術、パフォーマンス・アートなどの芸術表現活動を通して行われる教育である。平田（2006）は、表現教育について、多様な価値観が溢れている現代において、違いがあることを前提とした新たなコミュニケーション能力を育むため、芸術表現活動の持つあらゆる違いを認め合いながら、自己を表現しつつ他者と協働していくという特性が効果的であると述べている。また2010年度に文部科学省・文化庁の施策として実施された「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」事業を中心に、学校教育の中で様々な表現教育の実践、研究が行われたことや、歌唱やダンスを中心とするワークショップへの参加が自尊感情や肯定的な個人志向性を高めるといった研究結果からも、表現教育がコミュニケーション能力や自尊感情といった非認知能力を育む要因として効果を示していることが分かる（山崎，2015）。

本学でも、大学生の非認知能力を育む活動として、表現活動を通じたプログラムの提供を行っている。大橋ら（2017）によると、ダンス・歌唱・即興演技などの表現活動を通じた授業の中で、受講生のレジリエンスが高まったことが報告されている。その他にも、3日間という短期間で受講生がパフォーマンスショーを作り上げるプログラムや、大学生が指導者となり、小学生を対象に表現活動を軸としたプログラムを実施するアウトリーチ活動など、多様な表現教育のプログラムを提供している。しかしこれらの活動の中では、非認知能力にどのような心理的機能が含まれているのかといった非認知能力の定義を理解する内容や、活動の中でどのようにして非認知能力が育まれているのかといった教育的介入方法などについての教授は行われてこなかった。つまり、プログラムを通して受講生自身の非認知能力を育むことに注力して行われてきたが、受講生が非認知能力についての理解や知識を深め、将来自らが他者の非認知能力を育てていくための学びの機会の提供は未だ不十分なのである。

そこで本学では、参加者が単に自身の非認知能力を育むだけでなく、非認知能力への知識や理解を深め、他者の非認知能力を育む方法を歌やダンス、即興演技などの表現活動を通して学ぶ、新しい表現教育プログラムの開発を行った。新しい表現教育プログラムでは、非認知能力の中でも、本学全体で育む非認知能力として挙げられている「3Rs（Respect, Responsibility, Resilience）」と、これまで行ってきた表現教育活動の中で重要視してきた育みたい資質の両方の観点から、「自尊感情」「レジリエンス」「コミュニケーション能力」の3つの非認知能力をテーマとして挙げている。プログラムの内容は、テーマごとにそれぞれの定義について考える協働的活動、表現活動を軸としたワークショップ体験と分析、リフレクションを通して、それらの非認知能力の定義は何か、どのようにして育むことができるのかを自分ごととして捉えつつ、深く考えていく。プログラム内の知識を取得する場面においても、一方的な講義のスタイルではなく、身体的なワークや対話などの表現活動を取り入れた学びの機会を提供していることが特徴的である。大学生を対象とした非認知能力を育むプログラムや、非認知能力についての理解を深める講義などは既に多くの取り組みが行われているが、その両者をアクティブラーニングを通して複合的に学ぶことのできる表現教育プログラムの取り組みに関する実践報告として、本報告は意義があるものと考えられる。

Ⅱ. 研究の目的

本研究では、非認知能力についての講義と表現活動を軸としたワークショップ体験及び分析、リフレクションを組み合わせた新たな「表現教育プログラム」の開発について報告し、その成果と課題から、参加者の非認知能力を育むと共に、その参加者が他者の非認知能力を育むために汎用的に活用することのできる知識やスキルを学ぶプログラムの可能性を探ることを目的とする。

Ⅲ. 研究の方法

本研究では、2021年11月に4回に渡って実施した新たな表現教育プログラムについて紹介し、その成果と課題について報告する。

IV. 実践内容

1. 『EXプロジェクト～表現教育者育成プログラム』

本プロジェクトを開発・実施するにあたって、以下のように目的や対象を設定した。目的：『EXプロジェクト～表現教育者育成プログラム～』は、表現教育を活用する次世代の教育者になるための学びの場を学生に提供する新しい表現教育プログラムとして始動した。「表現教育とは」という問いを主題とし、講義、グループ対話や表現活動を通して、表現教育の実践者になるために必要な知識や技法について学ぶと共に、個人の内的成長を深めることをプログラムの目的としている。

内容：本プログラムは週1回のプログラムを3ヶ月に渡って行うものである。「自尊感情」「レジリエンス」「コミュニケーション能力」の3つの非認知能力をテーマとし、4回ごとに、ひとつのテーマの非認知能力の定義から育み方までを、表現教育の領域から体験・分析する機会を提供する。本稿は、「自尊感情」をテーマとした第一回～第四回までの実践の報告をまとめたものである。

期間：2021年11月5日～2022年2月4日 週1回計12回
対象者：本プログラムの受講生は、学内メールでの募集により集められた。本プログラムを受講した学生は、教育経営学科10名、現代経営学科4名、こども発達学科8名、体育学科1名の計23名である。また、学年の内訳は、1年生2名、2年生9名、3年生6名、4年生6名となっている。受講生のうち17名はそれまで継続的に表現教育のワークショップを行う学内の研究団体に所属して活動を行っている学生であった。その他の6名は表現教育の継続的な活動は行っていなかった。

2. 第一回『自尊感情って何?』

日時：11月5日（金）18：15-19：45

参加者：21名

実施者：3名

目的：自尊感情についての一般的な知識を深める

プログラム：

- ①他己紹介：参加者同士が知り合うためのアイスブレイク（15分）
- ②プログラム全体の説明（5分）
- ③「表現教育」についての講義（5分）
- ④「自尊感情」についての講義（15分）
- ⑤共有体験のワーク（25分）

⑥リフレクション：個人での作業→グループディスカッション（25分）

第一回では、講義に加え、五感を使ったワークやグループでの対話を通して、受講生が表現教育や自尊感情についての基礎的な知識を理解し、習得することを目的とした。

プログラムの前半では、自尊感情の構成要素、基本的自尊感情と社会的自尊感情の違い、また、基本的自尊感情を高める方法としての共有体験についての講義を行い、自尊感情の基本的知識の理解を図った。さらに、基本的自尊感情を高める方法の一つである「共有体験」を取り上げ、実際に体感してもらうことで、体験的に理解を深めている。

共有体験のワークでは、全員で外に出て同じ空間で10分ほど過ごし、五感で感じたことを記述した。その後、グループに分かれて気づきを共有し合い、互いの感覚の相違点や類似点について対話を行った。

リフレクションは、受講生のメタ認知を促し、自己理解を深めることを目的として、毎回のプログラムの終わりに振り返りの時間として設定している。第一回では、参加者が自身の基本的自尊感情を1～10で表し、その数値になった理由を考察し、グループ内で共有した。また、プログラムを受ける中で浮かんだ疑問や問いについて他者と共有し、考察する時間を設けた。

プログラム後には、受講生に、プログラム内容についての気づきや疑問点を問うGoogleフォームを使用した振り返りアンケートを行っている。このアンケートによる振り返りは、毎回のプログラム後に必ず行い、受講者の知識の理解度やプログラムへの充実度を測る他、彼ら自身がプログラムでの学びや問いを再認識することにより、知識を定着・発展させて行くことを目的とした。自尊感情という概念に初めて触れる受講生もいる中、第一回では、学生同士の活発な対話や、新たな問いを持つ学生の様子が多く見受けられ、自尊感情についての理解が深まった様子が見られた。

3. 第二回『自尊感情×表現教育ワークショップ』

日時：11月12日（金）18：15-19：45

参加者：19名

実施者：3名

目的：(1)自らの自尊感情について考え、高めるきっかけとする(2)多様な表現教育の技法に触れる

プログラム：

- ①前回の振り返り（5分）

②自尊感情についての身体性を用いたワークショップ (55分)

③リフレクション (25分)

④第四回で行う成果発表についてのガイダンス (5分)

第二回では、スタッフが実施する身体性を用いたワークショップを体験することで、受講生が自らの自尊感情について考え、表現教育の多様な技法に触れることを目的とした。

ワークショップでは、主に身体性を用いた応用インプロヴィゼーションのワークをいくつか行った。ワークショップで行ったワークの内容は表1の通りである。

表1 ワークショップで行ったワーク

セクション	ワーク名	活動の特性	内容	目的
アイ ス ブ レ イ ク	『お互いを知ろう』	自分自身を表現する活動	円になり、自分の呼ばれたい名前と、仲間に向けて欲しい自分のことについて一言で自己紹介をする。	「互いがあるがままに受け入れる」というグラドルールの体感
	『わけわかめ』	あえて失敗する活動	手足や体の左右で違う動きを同時に行う。ex. 右手はグーパー、左手はグーチョキパー	・身体のウォームアップ ・間違えても大丈夫な雰囲気作り
ペア ワ ー ク	『エナジーボール』	受け入れ-受け入れられる活動①	ペアになり、二人で手のひらの気を集めた「エナジーボール」を作りキャッチボールを行う。相手が形を変えたものをそのままの形で受け取ってから自分の形に変化させキャッチボールを続ける。	・他者との協働での創造、共有を体験する ・他者の提案をそのまま丸ごと受け入れてからアイデアを乗せていく(「yes and…」)を体験する
	『ミラー』	受け入れ-受け入れられる活動②	ペアで向かい合わせになり、順番を決めて鏡のように互いの動きを同時に真似する。	・身体的、直感的に「受け入れる」「受け入れられる」を体験する。
グ ル ー プ ワ ー ク	『オノマトベリレー』	受け入れ-受け入れられる活動③	①グループで円を作る ②オノマトベ(自作でもよし)を隣の人に伝える ③伝えられた人はそのオノマトベを自分の動きで表現する ④リレー形式で回していき、何周できるかを他グループと競う。	・他者の提案をそのまま丸ごと受け入れてからアイデアを乗せていく(「yes and…」)を複数人で体験する
	『オノマトベムープ作り』	自分が全体の一人であると感じられる活動	①オノマトベとそれに合わせた動きをグループで作り出し、表現してみる ②他グループの前で、グループとして発表する。 ③他グループは、どのようなオノマトベかを当てる。	・グループの作品の一部を自分の身体が担うことで「一員である」「役に立っている」という感覚を体感する ・発表を通して、外部からの承認を感じてもらおう

リフレクションでは、図1のグラフにワークショップ内での自身のテンション(気持ちの上がり下がり)の変化を記録し、グラフが大きく変化している部分について、各自で考察を行った。

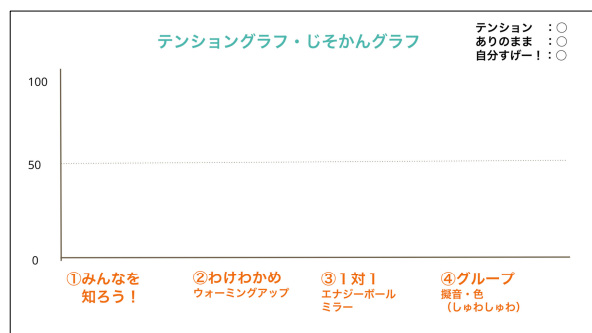


図1 テンショングラフ・じそかんグラフ

その後ペアになり共有、対話を行い自身の気づきを他の受講生と共有することで、無意識の意識化を図った。受講生からは、同じワークショップを受けていながら一人一人全く異なる感情の変化や着目点があることに驚きの声が多く上がった。当初は、テンショングラフに、基本的自尊感情を表す「ありのままグラフ」と「自分すげー! グラフ」も加えその変化についても考察する予定であったが、時間調整のため、次のプログラムまでの課題とした。

4. 第三回『ワークショップ分析』

日時: 11月19日 (金) 18:15-19:45

実施者: 2名

参加者: 16名

目的: 表現教育におけるワークショップのデザイン方法を理解する

プログラム:

- ①前回の振り返り (10分)
- ②受講生によるワークショップ分析 (15分)
- ③実施者からのワークショップについての講義 (15分)
- ④成果発表準備 (45分)
- ⑤リフレクション (5分)

冒頭の振り返りでは、課題として出していた「じそかんグラフ」をペアになって共有し、気づいたことについて対話を行った。

空間

音のある空間

全体をリラックスさせる
集中力を分散させる

↓

評価されている感覚を減らす

↓

力が抜け自分らしく表現しやすくなる




図2 ワークショップの分析 空間

人工物

紙とペンの使用: アナログな道具

・温かみや個性が分かりやすい
→他の人との違いに気付きやすいため、自分らしさを深めるきっかけになる



図3 ワークショップの分析 人工物

ワークショップ分析では、受講生がグループに分かれ、学習環境デザインに基づいた「活動」「空間」「共同体」「人工物」の4つの枠組みで体験したワークショップの分析を行った。学生の分析後、実施者から、ワークショップ内で行った活動の意図や目的、自尊感情ワークショップの組み立て等について、上述の4つの枠組みをもとに説明を行った。図2～図7は説明時に使用したスライドである。

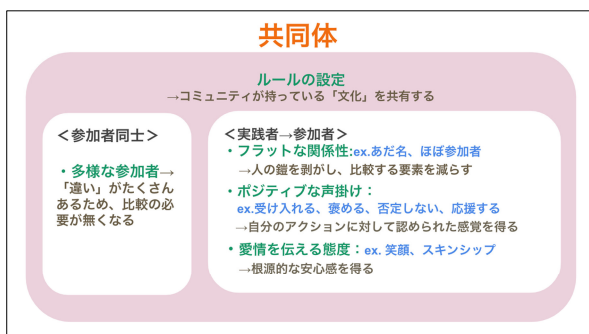


図4 ワークショップの分析 共同体

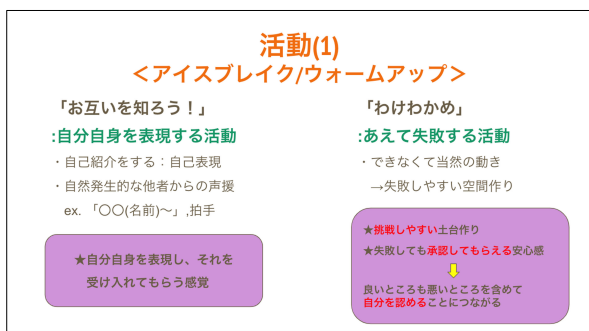


図5 ワークショップの分析 活動(1)



図6 ワークショップの分析 活動(2)

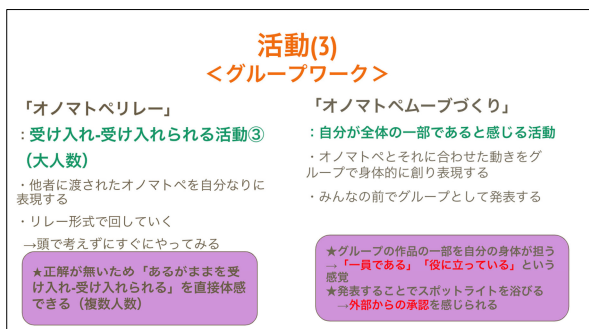


図7 ワークショップの分析 活動(3)

学生の分析では、グループ内で活発な議論が見受けられ、実施者が想定していたものとは異なる観点からの分析も多々行われた。また、実践者からの説明を受けて、空間作りの重要性について言及する学生が多く、表現教育のワークショップの組み立てや技法について多角的な観点から理解できていると感じられた。

分析後には、第四回に実施する成果発表に向けて、グループに分かれて準備を行った。第一～三回に渡って得た学びや気づきに言及し、新たに浮かんだ問いについて議論しながら成果発表の準備を行う様子が各グループで見られ、多くの受講生が知識を実践に活かしていると感じられた。

5. 第四回『自尊感情×表現教育 についての成果発表』

日時：11月26日（金）18：15-19：45

実施者：2名

参加者：19名

目的：学びの成果発表

実践内容：

- ①導入・発表準備 (10分)
- ②成果発表 3グループ (45分)
- ③しかけ共有 (15分)
- ④成果発表グループでのリフレクション (10分)
- ⑤ペアでのリフレクション (5分)

第四回では、成果発表会を実施した。第三回までに習得した自尊感情や表現教育についての知識、体験を通して得た学びを、実践を通して、定着させて行くことを目的としている。成果発表は4グループに分かれて行い、概要は以下の通りであった。

〈成果発表の概要〉

発表時間：各グループ10分

内容：二つの問いの内一つを選び、グループで発表する

問い①自尊感情とは何か

問い②自尊感情を高める方法

発表方法：表現活動・エンターテインメント要素を含んだ発表

成果発表では、全てのグループが、問い②を選択し、自ら考えた自尊感情を高めるワークを様々な工夫を用いて他の受講生に提供していた。発表後には発表内で取り入れた、自尊感情に刺激を与えるための「しかけ」を共有することで、受講生のそれまでの学びの理解度や技法の習得を測った。また、各グループの発表後、参加者による発表者へのGoogleフォームを使

用したフィードバックを実施し、リフレクションの際に自分のグループへのフィードバックを確認することで新たな気づきを生むきっかけとした。

成果発表を終え、アンケートや受講生の様子から、学びの実践を非認知能力や表現教育の詳細な技法への興味・関心の高まりが窺えた。

6. 実施者によるプログラムの振り返り

全4回のプログラム終了後、実施者2名でプログラム全体の振り返りを行った。この振り返りは、次回以降のプログラム作成に繋がる課題をあげ、改善方法を探ることを目的として実施したものである。

初めに、実施したプログラムの課題点について、プログラム中の受講生の発言や様子、時間外に受講生が行った課題、振り返りフォーム等を参考に、ブレインストーミングを用いて洗い出した。その後、課題の改善方法について同様にブレインストーミングでアイデア出しを行ったあと、KJ法を用いて要素分けを行った(図8)。

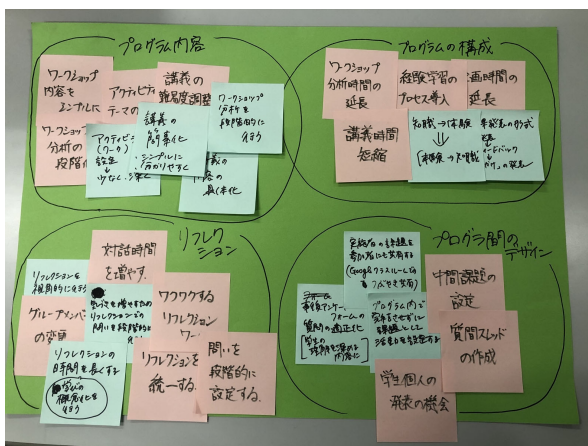


図8 プログラムの改善方法

受講生の中には、プログラムで扱った内容や概念について初めて触れた者もあり、知識の理解に時間がかかる受講生も見受けられ、受講者間の理解度には差があった。また、講義やワークショップの内容容量が多く、対して受講生が自ら理解を深め、新たな問いや気づきについて考えるための対話やリフレクション、分析の時間が不十分であったことが課題としてあげられた。特にリフレクションについては、受講生がプログラム内で得た知識を定着させ、自らの問いを深め、新たな気づきをもたらすために重要な時間であり、この時間の量、質をともにあげていくことが課題として上がった。

改善方法については、主に以下の4つの項目があげ

られた。

①プログラム内容

プログラム内で行う講義やワークショップ、その他の活動の内容に関する項目である。受講生の知識の理解度を高めるため、講義を簡潔に具体的な事例を用いながら行うことや、受講生自らの追求心と学びを深めていくためにワークショップ体験や分析の中で実践者から段階的に問いかけを重ねていくことなどがあげられた。

②プログラムの構成

プログラム内の活動の構成や時間に関する項目である。学生の内容の理解度をあげる方法として、経験学習サイクルを利用し、プログラム構成をワークショップ体験を初回、講義をその後に行うということが上がった。この構成の変更により、体験を概念化して知識として定着させるということが可能となり、受講生のプログラムで扱っている概念への理解度が上がるということが推測される。また、講義時間を減らすことで、グループ活動や対話時間など受講生が主体的に学びを行う機会を十分に確保することなど改善方法としてあげられた。

③リフレクション

毎回のプログラムの後半で行ったリフレクションに関する項目である。リフレクションに十分な時間を確保するために、講義やワークショップ時間を短縮することや毎回のリフレクションの形式を統一することなどがあげられた。また、リフレクションの質を向上させる方法としては、視覚的に残る記録を残すこと、段階的な問いを設定してより深い学びを促すことなどがあげられた。

④プログラム間のデザイン

プログラム時間外に行う、受講生の学びを深めていくための学びのデザインについての項目である。改善方法の一つとして、90分のプログラムでは実践者から受講生に与えられる知識や問いかけに限られるため、プログラム時間外にGoogleクラスルームなどのプラットフォームを通して、受講生がプログラム中の気づきや学びを自ら深めていくための働きかけを行うことの重要性があげられた。具体的な方法として、振り返りフォームの質問内容について受講生の学びを定着させるために適正化することや、質問スレッドを作成し、学生同士の対話をプログラム時間外でも促すこと、実践者自身のプログラムを実施して出てきた課題等を共有することなどがあげられている。

V. まとめと考察

本研究では、非認知能力についての講義と表現活動を軸としたワークショップ体験及び分析、省察を組み合わせた新たな「表現教育プログラム」の開発及び、4回に渡って実施した「自尊感情」をテーマとしたプログラムの実践とその振り返りについて報告した。

プログラムを実施する中で、プログラム内での発言や活動の様子、時間外の課題、振り返りフォーム等から、受講生の自尊感情や表現教育に関する知識や理解の深まりや技術の習得、興味関心の高まりなどが窺え、新たな「表現教育プログラム」の可能性が感じられた。一方で、本研究では尺度などを利用した量的調査等を用いていないため、実際に受講生の自尊感情やその理解度についての変容の数値的分析は行えていない。

プログラムについては今後も「レジリエンス」と「コミュニケーション能力」をテーマに継続して行っていくため、振り返りであげられた改善方法を用いてプログラムを発展させていくと共に、受講生非認知能力の数値的な変容についても調査、分析を通して検証していくことが今後の課題であると言えるであろう。

引用文献

- 無藤隆 (2016) 『これからの幼児教育2016－生涯の学びを支える「非認知能力」をどう育てるか－』ベネッセ教育総合研究所
- 中山芳一 (2018) 『学力テストで測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍
- 平田オリザ (2006) 『表現教育はなぜ必要か』日本労働研究雑誌 549, pp9-12.
- 山崎晃男 (2015) 「集団による歌唱・ダンス活動と向社会的特性との関係およびその教育的意義について」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』 5, pp35-42.
- 大橋節子・寺岡陸・ナリスマノロスカル他 (2017) 「初年次教育におけるアクティブラーニングの有効性－「表現活動」の実践を通して－」『環太平洋大学研究紀要』 11, pp45-51.